

ふるさとを愛する

本校の学校教育目標は「ふるさとを愛し 心豊かに たくましく生きる児童の育成」ですが、皆様方の学校評価の結果や先生方の意見をもとに、学校教育目標がめざすものについてあらためて考えてきました。そのことは、11月末からの「たのしい たのしい 船穂校♪」にも書きましたが、来年度の学校経営目標を決めるにあたって、ふるさとを愛するとはどのようなことなのか、そのためにはどのような取り組みをすべきなのか考えてみたいと思います。

子どもたちが生きていくこれからの時代は、グローバル化、情報化が進むと言われ、4年後には東京オリンピックが開催され、外国の方も多く来られるでしょう。しかし、一方では、少子化、人口減少、コンピュータやロボットの導入による職の喪失などの不安な面もあり、変化の激しい時代だと考えられています。そうした時代を心豊かにたくましく生きていくためには、自分という存在に自信を持ち、周囲の人たちを好意的に受け入れることのできる安定根のある人でなくてはなりません。そうした人に成長するために、ふるさとを愛する気持ちが大切なのだと思います。人がふるさとを思う時、家族や友だちや地域の人、担任の先生などとの、忘れ難いあたたかい関係やつながりがその基盤にあると思います。そうした関係が築かれた場所の山や川などの自然、産業、文化財などに人は愛着を持ち、ふるさとを愛するのではないかと思います。

小学校では、生活科や社会科、総合的な学習の時間などで地域を教材とした学習をします。その学習の中で、地域のことを理解し、地域に住む人たちのはたらきを知ることによって、地域に対する愛着が育まれますが、学年が進むにつれて、その対象は、学区から倉敷市に岡山県にそして全国にと広がっていきます。「ふるさとはどこですか。」と聞かれたときに、人は、聞かれた場所や相手によって、「船穂です。」とか「倉敷市です。」とか「岡山県です。」と答えると思います。海外で聞かれれば「日本です。」と答えるでしょう。「ふるさと意識」は社会に対する所属意識であり、将来、東京や大阪などの都会や海外で活躍する子どもも多くいることを思えば、その対象を船穂学区から倉敷市に、岡山県に、日本にと広げていくことも重要です。

子どもたちが生きていく時代を変化の激しい時代だと言いましたが、わたしが生きてきた時を振り返っても、オイルショック、円高不況、バブルの崩壊、リーマンショックなどの経済的な危機や、阪神大震災、東日本大震災、最近では熊本地震などの自然災害がありました。このような危機にわたしたちの祖父母は、父母は、そしてわたしたちは、困難な状況に立ち向かい生きぬいてきました。苦しい状態にあっても、家族や仲間と手を携え励まし合って生きてきた人々の姿が、学校教育目標がめざす人間像のようにも思えます。

学校教育目標をこのようにとらえると、今まで取り組んできたこと、今年度取り組んできたことをこの視点で見つめ直せば、来年度に取り組むべきことがはっきりしてくるのではないかと考えました。次号からは、その具体的な方策について書きたいと思います。